

宗長の句集「壁草」その他のについての覺書

伊 地 知 鐵 男

宗長の連歌句集としては「壁草」二冊が流布して著名である。
写本として寓目したものに

- 一、図書寮蔵山田通故筆本（上下注釈）
 - 二、静嘉堂蔵連歌集書本（上下）
 - 三、三手文庫本（上下）
 - 四、太田武夫氏蔵本（下）
 - 五、同蔵加持井本（下注釈）
 - 六、岩瀬文庫本（下）
 - 七、上野図書館蔵連歌合集本（上）
 - 八、旧古粹堂本（下）
 - 九、家蔵伝平田墨梅筆本（上）
 - 十、続群書類従本（下）
 - 十一、天満宮文庫本（上下）
 - 十二、天理大学図書館本（発句注釈）
- の十二の本がある。

壁草としては、続群書類従連歌部に収録され翻刻されてゐても著名であるが、続群書類従の原本は元来、下巻（巻六窓上一巻十発句）のみで、活字刊行の折あたらしく上野図書館蔵の連歌合集第五輯所収の室町期写本（上巻）前記向をもつて補充翻刻した取合せ本である。随つて続類従本の巻上、巻下は一応別個のものとして考察しなければならない。

一、図書寮蔵山田通故筆本は旧高野班山文庫本で、芝鳥森の神主で幕府の御連衆をもつとめた連歌師山田通故の書写本である。半紙判二冊、一面十二行書、上冊は四季、旅、下冊に戀、雜、発句を収めたもので、各句には注釈が附せられてゐる。この注釈本と同系統のものに、後半の殘闕ではあるが室町末の書写岡加持井本（太田武夫氏蔵）がある。

注釈は誰の手になつたものか明かでないが、巻八雑上の一旬
身やことし都をよその春がすみ

まだき野山の花のあらまし

の注に「宗祇田舎へ旅行のあらましせし春の発句也」云々とあり、
巻十発句のうちに

ほとゝぎすみやこおぼゆる初音かな

田舎にての発句也、都にても聞しをおもひ出たる心也、

の注文は、たとひ前者が明応八年正月四日種玉庵に於ての有名な何人百韻であることが、当時常識になつてゐたにしても、多分に宗長に直接質疑聞書したものか、でなくとも年代的に極近い頃の注解聞書でなければ書けない注文であることが推測される。事実この注釈とは異文であるが、天理図書館の旧北田紫水本「雑連歌」とは壁草発句の注釈であつて、その奥に

一とせ駿河國にて、此こゝろ／＼を宗長にとひ侍し聞書を、いさゝかつしるし付侍る物也、定てひかおはえともにてそ侍らん、外見憚おはき物なるへし

幸 波在判

とあつて、宗長ちぎ／＼の聞書で、壁草には已にその当時から注釈聞書の存してゐたことが判明する。加之、彼には後述する「宗長連歌自注」の如き注釈も現存してゐることも考慮に入れなければならない。

なほ本書には巻九雑下の終りにちかく八句（原本一校分）の脱落がある他は、比較的本文にも誤のすくない善本である。奥書には、宗長自身の、

此両冊は宗祇古人、越後国守護戸部に八十の残生を養はれて侍りし、文龜始の歳秋長月のくれ訪下し時、其国に有人、愚句を響集めたりとて見せしむ、雪中つれ／＼の餘に、四季戀雑と分置て侍るを、宗祇且はなをし、且はくはへなと心をやることにせしを、さらは根もなきこと也、壁草といはんとい

へは、さもや有へからんとてうち笑草（也）、なを文龜より永正九の年のきのふけふまでのを、かき入つれば、本のは二三百員（句）には過ぎらむかし、宗祇、老葉、下草等のはゝかりもありぬへけれど、よしその露にたにもかゝらまほしくて、人のいひおもはん處を、おもはざる物なるへし

横へひきたてになりつゝ老か手の

又こまかへる筆の跡かな

宗長在判

註一ハは著者注。（）は古梓堂本との校異。

の奥書がある。この宗長奥書は旧古梓堂本等の他本にも存するが、和歌一首のみは他に所見のないものである。

この系統本には無注釈ではあるが（一）静嘉堂連歌集書第六〇、六一冊（圖書寮本筆者山田通故の孫通孝の書写集書したもの）、室町末期書写の（三）三手文庫本等があつて、写本としては一番流布してゐる系統である。三手文庫本には、例の宗長奥書はなく、

先年、宗祇越州にて被下此一冊、入披見了 宗長

とのみある。いまこの系統本を第一類本と仮称する。

五、岩瀬文庫本は後半（発句）のみの残闕一冊本で、奥に
大永三年五月十九日 内山上乗院之以本書写了

律師 尊俊

とある室町期の書写、兼載の園塵と同一筆者の写本である。本書は山田通故本以下の第一類本に非常に近親な句をもつてゐる。兩本の所収句の大部分は、極少数の誤脱を除けば、全く一致して、第一類本系統とみることに異論はないが、たゞ岩瀬文庫本中の若

千の句頭に。印の標注が注されてゐる。たとへば巻六上上の

君があたりをやすくすぎめや

。なみだこそながむるかたの夕時雨

以下一句、巻七窓下に入句、巻八雑上に入句、巻九雑下に一四句、巻十発句に二二句の句頭に肩付されてゐる。しかもこれら肩付された句の大部分——悉皆といつてもよい位の句は、図書寮本以下の第一類本にないのである。これはいづれか一方の削除か、増補かの改訂による句の出入であることは明かである。

なお(四)太田武夫氏蔵本は室町期書写の下巻一冊の残闕で、図書寮本に比し句数は窓下に一句、雑上に二句、雑下に九句、発句に三句多く、雑上は一句少い。この雑上の一句は太田本の脱落、雑下の八句は図書寮本の脱落で、残七句は悉皆、岩瀬本に肩付された句のうちである。このことから強ひて分類するとすれば、寮本に總にもかく岩瀬本と寮本との中間的なものである。

七、上野図書館蔵連歌合集本は、前述したやうに統群書類従に翻刻された室町期の写本、一面一三行書、「壁草」上と内題、端作には巻数の記入はなく、たゞ「春連歌」「旅連歌」等とのみ注されてゐる。尚、本書には左の四個所に脱落誤写がみられる。秋連歌の一個所九六一頁下段は

さそはれ月にふくる夜の空

哀にもつらにをくれぬかり鳴て(はな)(図書寮本による)

をくりかねたる古郷の秋

雲行ていくほどもなく(はな)舞はきぬ(家蔵本による)

と、冬連歌の二個所九六六頁下段 九七〇頁上段 一〇一—一行は

をとあらしき水のしらなみ

しぐるやと見れば岩こそ木葉にて

としくれぬとや雪ふれる山

木からしにのこりてさびし峯の松」(図書寮、家蔵本等による)

たちやすらへば猶さゆるそで

(うつみ火にかへるを月やうらむらん

さえまさりぬるをちかたのそら)

まどろみしうつみ火もきき鐘なりて(図書寮、家蔵本による)

と、旅連歌の一個所九七五頁上段 一二行は

あすのみちまで旅やいそがん

追風をまほにひきかけ行舟に

一夜をたのむ舟のとまふき

風そよぐあしのかりねは夢もうし(両本による)

と訂正されねばならない。且又たとへば本書所収句春連歌の一七二句の内、図書寮本と共通した句が一〇三句、本書にあつて図書寮本にない句が六〇句、その逆は六九句を算へる。いまだこの類本を知らないが、後述する(九)の解説に注した図書寮本との対比と比較勘案して、纔かなから図書寮本等の第一類本にちかいが、又別系統本と見做さるべきものである。

八、五島慶太氏蔵旧古梓堂本「壁草」下「一冊は一面一四行書き、室町期の書写。合集本とおなじく端作に巻数の記入はないが、巻末には宗長奥書をもつてゐる。因みに前掲図書寮本解説の条に引用した奥書の傍注括弧の校異がそれである。本書の所収句につい

ても、未だこれに類する写本に接しないが、強ひて云へば、前掲(七)合集本とおなじく第一類本系に微かな類縁性が窺はれる程度である。いま、これら(上)上巻、(下)下巻を一括して姑く第二類本と仮称する。これは両本が同系統だといふ意味ではないが、後に詳述するやうに、他系統本に対校して、句数、句の出入の傾向、句の記載順序等において、両本が同一傾向をもつてゐることは否めない。

九、家蔵伝平田墨梅筆本は旧英王^{チエンパレン}堂蔵書で、室町中期の書写、胡蝶装、一面一〇行書、四季、旅の前半残闕である。本書もその端作には「鹽草」「春連歌」とのみあつて、巻数の注記はない。所収句について、たとへば春連歌一四三句のうち、図書寮本に共通の句は八三句、本書にあつて図書寮本にない句が六〇句、その逆が八〇句を算へる。この系統に(十一)天満宮文庫蔵の南曲新写の上下両冊の完本がある。一方、続群書類従本下は江戸中期の書写、美濃判一冊本である。巻頭に「寶云、コノ本下斗ナリ、上巻可写補、金性院ニアリ」と堀忠宝の朱注があり、雑下一部に一面の衍写(但類從活字本には削除さる)がある。いまだ精密な対校は終了しないが、恐らくこれは天満宮文庫本と同類と見做されるやうで、この系統本を便宜第三類本と呼称する。

二

いま便宜、以上のやうに諸本を三類に區別したが、その各本間の句数を表示すれば

(図表一)

英王堂本	古梓堂本	合集本	岩瀬本	集書本	図書寮本	
／	／	172	／	163	163	春
／	／	70	／	72	72	夏
／	／	185	／	185	185	秋
／	／	100	／	87	97	冬
／	／	113	／	119	119	旅
106	148	／	131	120	120	上恋
117	118	／	101	92	92	下恋
206	176	／	141	133	133	上雑
178	218	／	192	177	169	下雑
188	(?)	／	248	236	236	句発
第三類本	第二類本 古梓堂本の発句数は未調査		第一類本			

図表一において図書寮と集書本とは筆者が祖父(通故)孫(通孝)の關係にあり、両本は同一系統と断じて誤ではない。たゞ通孝筆の集書本が通故筆の雑下の脱落八句を補つてゐるだけの相違である。岩瀬文庫本は、この第一類本のほかに、前述したやうに○肩付の句だけが増加したもので、太田本と共に第一類本に属すると看做すべきであらう。

第二類とした連歌合集本と第三類に属する英王^{チエンパレン}堂本の句を、

第一類圖書寮本の句数に比較すると、前述したように春部において共通句が一〇三句と八三句とで、第二類合集本が二〇句も多い。同様に冬部にあつても七九句と五八句で、第二類本が二一句多い。これは蓋然的ではあるが、第一類本には第二類本が第三類本よりも親縁性が濃いと云へるであらう。

かゝる傾向は上巻に限つたことではなく、下巻の古梓堂本（第二類）と続類従本（第三類）とを、第一類本に比較検討しても云はれうところである。その他、句の記載順序の点からも、第一、二類本の親縁性は指適されるやうである。たとへば、巻六恋上における

要名はたつといひやのがれん
いかにせん心のしるを我おもひ
心のうちにあらましのすゑ

ぬれにけりいはぬをしるや袖ならむ

の句序は、第三類類従本は第十三、十四句目^{九七六頁下}であるが、第一類圖書寮、第二類古梓堂本によれば第四、五句目に位ひする。同様に「一ふでをかこちなくさめ打をかで」^{一五七六頁下の句}

は第一類本には「恨なよえさらぬさはりなき世かな」^{九七九頁上}

の句から算へて三句目後に、「つれなくばやましといへばとふもう

し」^{九八〇頁上}の句は第一類本には「おもひ出てとはんことこそ

かたからめ」^{九七九頁下}の句から算へて二句目後に収録されてあ

る。巻七恋下においても、第三類続類従本の巻頭、第二句目の句は第一類本によれば第十三、十六句目に位置し、第一類圖書寮

本、第二類古梓堂本等における巻頭以下の諸句は第三類続類従本にあつて第六句目以下に散見される。かうした句序の相違は誤写による不一致とは到底考へられず、恐らく意識的な改訂による序次の変更と考へる以外に方途はない。随つてこの場合にも第一類本（圖書寮本）と第二類本（古梓堂本）とが内容的により近似してゐることが判明する。（図表二、三、四参照）

いま一つ、この第二類本について留意しなければならない点がある。上巻にあつて英王堂本と合集本との共有句は、春部に一二八句（英王堂本にあつて合集本にない句が一五句、その逆が四四句）夏部に四九句（英王堂本にあつて合集本にない句が四句、その逆が二一句）といふ約九割の多きを算へて両本の親近性が窺はれる。この傾向は同様に下巻、続類従本と古梓堂本の場合にも云はれ得るが、その他に岩瀬文庫本に肩付された句の若干が両本の中に見出される。しかもそれが第二類古梓堂本により多く見出されることは、岩瀬本と古梓堂本とのより濃い親縁性が窺はれる。しかも一方このことは第一類本のうち岩瀬文庫本と圖書寮注釈本との撰成の先後に一つの手がかりとなりうると考へられる。

以上、諸本間における内容的親縁性の濃薄を問題にすれば、次のやうな関係になると思はれる。

第三類本（英王堂本・続類従本）——第二類本の合集本・古梓堂本——岩瀬文庫本・太田本——第一類本（圖書寮本・集書本）

しかしこの図表が、そのまゝ無批判に諸本撰成の先後を意味するとは考へるべきではない。撰成の先後を判断推定するには、一応この親疎関係を基にして、その上での考証確認が必要であらう。

しかしその前に、前掲した宗長奥書によつてまづ壁草撰成の事情を考へてみよう。

奥書によれば、宗長は文亀元年九月、越後国上杉房能の許に病臥してゐる宗祇を看護するために下向した。そこでめづらしく或人が書集めた自分の句集を見せてくれたので、それを基にして師宗祇の加除添削の指導のもとに、四季恋雑に部類する句集編纂に着手した。その第一次編集が何時了つて「壁草」と命名したか、奥書にはたゞ「なを文亀より永正九の年のきのふけふまでのををかき入つれば」と云つてゐるにすぎない。この表現からすれば、未だ越後滞在在中か、すくなくとも文亀二年、宗祇死後までには、一応のまとまりが出来て壁草の草案は出来してゐたと考へるべきであらう。かく考へて、初めて「なを文亀より」云々の意味が明瞭になる。しかし宗長の編集改訂は、その後も継続されて、この奥書執筆の永正九年までつゞいたことは明かである。

さて以上のやうな編集経過から考へて、当然永正九年以前にも幾種類かの壁草の存在、流布が予想されるのであるが、現存する壁草の諸本は各々どんな關係に位置されるべきであらうか。

そのために、先づ最も親縁性のうすい第一類函書寮注釈本と第三類統類従本との発句の部を比較検討してみよう。発句を選んだのは、比較的発句が年次判明に便利であるからである。発句のうち、年次の判明するものは必しも多くはないが、発句巻頭の年内立春の句は明応六年正月一日何人百韻であり、その後、永正二年八月廿二日玉何百韻の発句

興福寺妙徳院にして

ちりてわかはらふ砌の柳かな

の句までは諸本に共通して収録されてゐる。しかし

古白故人一回の茶湯の次に、経文をかなの百字にわけて百韻の連歌独吟し侍し発句、おもて八句やしようほうしつさう

霜にさめて跡やかれ野の花の露

は永正四年十一月三日牧野古白（左衛門尉成時、三河国今橋の城主、同三年十一月今川氏親によつて落城、切腹す）の一周忌追善の発句であるが、この句は第一類本系統にしか存しないものである。その他、秋発句以降に散在して、おなじく第一類本にしか所見のない

遠き国のあらましし侍る一日のほとに人の興行に

風にみよいまかへりこんくず葉哉

以下十八句は、永正六年七月から十二月にかけて白川関一見を志して関東一円の旅行を記した「東路の津登」に収録されてゐて、その間の発句である。その他、

（正月七日）
人日に子日ありし年に

けふに逢て松引わかなつむ野哉

三月一日巳の日に

けふはみな身のはらへせぬ人もなし

の二句は永正六年か、七年の詠吟であることが判明する。これらのことから、第一類本系統はすくなくとも永正六年十二月迄の発句を収載してゐるに反し、第三類本系統には永正二年八月までの句は収録されてゐるが、四年十一月以降の句は見当たらないといふ

ことが判明する。なほ便宜、諸本の発句の巻頭数句を比較すれば、図表二の如くである。

この発句序次の図表二によれば、古梓堂本と岩瀬文庫とが最も親しく続類従本が次いでゐる。そしてこゝにおいても永正六、七年の句をもたぬ第三類本と第一類圖書寮本が最も疎遠な関係にあることが判明する。この諸本間の関係は大体において妥当であるが、第一類の岩瀬文庫本と第二類本とはさして親近なものではない。それは左に掲げる図表三の巻六恋上において指摘されるが、その他の諸巻においても同様である。

かゝる傾向は「壁草下」のみに限らず、上巻にあつても言はれ得る。巻一春連歌の巻頭数句の序次を示せば、図表四の如くである。

以上諸本の句の出入有無、句の序次等を比較した結果を要約すれば、

第三類家蔵英王堂本、続類従本等は永正二年八月以後同四年十一月以前の撰成と考へられ、その他第二、第一類本系統は永正六年十二月以後奥書にいふ同九年の間の撰成と推定される。そのうちでも第二類本系が第一類本系よりも早く成立し、次いで第一類中岩瀬文庫本、更に太田本とつき、最後に圖書寮本等の第一類本が成立したことになる。

三

壁草は、その発句の年次からは永正六、七年のものまでしか究明できないが、奥書によつて「永正九の年のきのふけふ」まで

（宗長六十五歳）の作品を集めたものである。

宗長の句集として、その他に名を知られてゐるものに「那智籠」、「老耳」があり、その他小句集として「宗長百番連歌合」（実隆・肖柏阿判）、「宗長連歌自注」「宗長付様」等がある。

一、那智籠 上下一冊、北野神社蔵で宗長自筆と伝へられる。宗長第二の句集である。壁草が永正九年までの句集であるに對し、本集は永正十二、三、四年の二箇年における句集である。又壁草が四季恋雜発句の勅撰集部立によつて部類されてゐるに反し、本集は各年度別に、年度内を発句、付句に兩分して収録してゐる。上巻巻頭は

永正十二年正月七日草庵にして

おいがためつみてをもみむわかなかな

信の國淺間のわたりより人の所望に

山や春雪げながらのかすみかな

にはじまる発句八七、付句七七句を収め、下巻巻頭は

永正十三年正月六日北野會所の坊主興行に

朝霞さゆる空なきひかりかな

の発句五一、付句巻頭は

ひだすら苔のころもならずや

花をみる心はおいのくちやらで

にはじまる一〇〇三句、終に

此一冊は永正二十三四、度々一座、あるは千句などの中の愚句、少つゝ書拔擧、老後忘却、自然の等類を引見侍らんかため、比興々々

と自記した宗長の奥書がある。これによれば、十四年の句も当然収録されてゐると考へられるが、発句、詞書等の記載形式からは判別できない。永正十二年以後宗長の動靜は「宇津山記」によつてわづかに鮮明しうるが、本集によつて一層詳細な彼の足跡をしることが出来る。

二、第三句集としては「老耳」一冊の仮綴本がある。旧七海兵衛蔵の真如蔵本、天文十九年以前の書写である。内題に「老耳大永二三四五六」とある大永二年から六年に互る五箇年間の句集。本集の部立は又異なり、まづ発句と付句に類別し、そのうちを大体年次別に収録してゐる。大永二年発句の初は

年／＼の春や立かへる朝霞

にはじまる五三句、三年が三二句、四年が一七句、五年一七句、六年二四句の計一四三句の発句を集める。なほ各年巻頭の句は次のごとくである。

鶯も春をこめきやその／＼竹（同書）（同三年）

梅花うつりしそでは朝霞（同四年八幡の梅坊にて）

あまを舟春やあこぎが浦の松（同五年伊勢阿野津より所望に）

天原ふしやかすみの四方の春（同六年）

付句は

とはぬそらなき峰／＼の春

霞たつ遠山ふしもことかたれ

にはじまり、終に

大永二年已来のこゝかしこ、愚句一座一両句つゝ警覺候を、

自然愚句の等類のために書集物なるへし

といふ、等類をのがれるための備忘録として書集めた由の奥書があり、集全体に互つて「。兩種の合点が附せられてゐるが、誰の批点であるかは判らない。

三、小句集としては宗祇に点を乞ふた「宗長付句」が京大図書館平松本にある。巻頭句は壁草の巻頭と同一、計一〇〇句の付句のみである。撰成は宗祇に批点を乞ふたとすれば文龜二年以前であり、彼の句集としては初期のものであらう。現在合点は五七句にあるが、奥に宗祇の返書が注され、

此百句、愚点之長短之事、大かたの合点さへ分別なくは侍れと、所望さるかたきにまかせて、六十四句之僻墨を付侍る者

也

宗祇判在

とあるものである。

四、宗長百番連歌合 内閣文庫以下諸所に流布してゐる連歌合で、巻頭第一番の左右は、そのまゝ第二類連歌合集本壁草の巻頭を飾つてゐる。各番には「槐陰散木迷虚子」三条西実隆、夢庵老人「牡丹花肖柏の詳細な判詞をつらね、付句は九十番迄の一八〇句、発句はそれ以後の十番二〇句を算へ、巻末に二人の跋文を添載してゐる。永正五年夏の編修と考へられ、六月に肖柏の判、七月（再昌草による）に実隆に判詞を乞ふたものである。その多くは壁草に再録されてゐる。

五、宗長連歌自注 図書寮蔵桂宮本。江戸初期の書写、その一は、かすめるほどぞわくかたもなき
けさはまた去年か今年の空さえて

にはじまる付句一九九句を四季恋雑に部類し発句三〇句をのせ、各句に自ら詳細な注釈を附して、本歌、証歌や寄合を教示したものである。奥に

愚句寄合付の事数年承候、さらにいつれを、それともいひかたは侍れと、此度熱海湯治中、いさゝかつゝしるしあつめ、又こゝもとまで此比の愚句中、かならず寄合とはなれと、本歌などをよそ書加候、老かおほえの事のみおはかるへく候、比興々々

宗長判

興津藤兵衛尉殿

と、今川氏親の被官興津藤兵衛尉正信の需めに応じたもので、発句巻頭の「七十の春をのみつむわかなかな」によつて、宗長七十七歳、永正十四年前後の成立が推測される。

その二は、付句一〇二句を、なんら部立を設けず四季恋雑の順に収録、注釈を加へたもので、巻頭句は

かすみを袖にわくる山みち

日影さすかたへのどけき峯さえて

峯の餘響、かたわけて長閑なる方の霞成へし、袖は霞と覚ゆにはじまり、奥書に

此愚句一冊、御懇望之由被所^(男力)傳達之間、注進入候、比興々々、八句餘之愚句無是非也、一笑々々

壬生下総守殿

宗長判

とある享祿元年（宗長八十一歳）以後の成立。宛名の下総守とは確証はないが年代的に考へて、関東の宇都宮の被官壬生下総守綱雄（天正四年二月廿五日叔父局長のため生害）宛のものではな

らうか。

六、「連歌付様」の外題をもつ永祿四年閏三月の書写本。図書寮蔵。大永六年以降八年^{享祿}迄の句集、内題、端作もなく、巻頭は

たてるばかりのかすみなるらむ

よしの山いづこもいまだはる冴て

の付句にはじまる一八二句を部立を設けず自注し、次に「発句大永八」と端作して

しづはたにをりはへたてる霞かな

の発句計一八句があり、終つて

近衛殿、仰愚句之事可進覽之由、去々^(大永六年)春より被仰候とて、度々其に承候つる、不及是非罷過候、去年春江州矢嶋又御下候

て、仰之通承候つれとも、罷下候處、此度其への御書下給候、此上はとかく申も還而中々自由緩怠、狼藉至極候之間、

去々^(大永六年九月十七日)年寺町千句中十余句、矢嶋より罷下路次、伊勢、尾張一座つゝの中、当國罷下月次連歌^(大永六年)中貳百余句、於灯下注進候、人にあつらへかゝせ候、^(西殿へ)申上添削之御點申請、

廿句三句にて御點清書候とて、壽慶頼入候、急便閑筆候

承菊蔵主

宗長判

とあつて（括弧内著名の注文）、大永六年春頃から近衛頼家の嚴命にも拘はらず打捨てゐたが、尊命もだしがたく六年九月の寺町千句以後、伊勢尾張等の下向途次の句、さては当國（駿河國か。妙くとも尾張・駿河國の間であらう）においての月次連歌等のうちから二百余りの句を撰んで、実陸の合点を乞ふたものへ、更に自注したものであることが判明する。

七、宗長発句一卷は京大文学部図書室本で、宗長、宗碩、寿慶、周桂、宗牧、宗養、宗從等六人の連歌師の発句集を合集した書冊の一部である。

越前にて

桜麻のおほかる竹のことしかな

よともにもせきいれし水や夏の庭

の夏にはじまり、「八重かこふ花やうす色かきつばた」の夏に終る発句集である。詞書の多くは肩付に注され、壁草所収の句が多いところから、永正年間乃至以前の句集かと考へられる。

八、「発句 宗長」は家蔵本宗長百番連歌合に合綴された発句集三〇句、

めもはるにいつれか柳さくら哉

するが小川にて

松の葉は花ぞみつ塩山桜

にはじまり、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江ときて京都「紫野真珠庵にて」の夏の発句に終る句序をみると、某年上洛の途次の句群であらう。

九、宗長法師百句付句 二部は静嘉堂連歌集書第四七冊に合綴されてゐる。

一、は端作に「百句」附句 宗長法師」として付句一〇〇、発句一一句を集めたもの、付句の初は

柳さくらに春風ぞふく

山のはに都の霞たちそめて
とあり、付句一〇〇句、発句は

見れば春入たつ門の柳かな
にはじまる一句である。

二は、端作下に「宗長法師」とのみで

神無月山は常世の岩根かな

今はたゞうき名たゞんもいとほめや

花ゆへあだの身はいかゞせん

に初まる発句一、付句一二二句の小句集で、共に坂昌成本をもつて天保六年七月山田通孝の書写したものである。撰成年次等いまだ精査してゐない。

一〇、宗長自讃付句は天理図書館北田紫水本で、外題「萬聞書」とある弘治二年五月の写本である。一、詞寄の解、二、連歌續詞（宗祇）三、連歌分別の詞（兼載）その四に「付句 宗長」と端作して、自讃の付句一句を齊集めたもので、巻頭

思ひかねつゝうかれきにけり

さそはれぬ老こそうらみ花のもと

にはじまる、巻末に「宗長自讃の句として、ある人の被申候」と職語がある。真偽のほどはさだかでない。

(図表二) (註) 句頭の数字は各写本の句の序列番号である。

1 明徳六年正月一日何入百韻の発句

5 永正六(七カ)年正月七日庚子(甲子)の発句

<p>巻十発句 読類徒本(第三類)</p>	<p>古样堂本(第二類)</p>	<p>(第一類) 岩瀬本</p>	<p>圖書寮本</p>
<p>年の内立春ありし正月 十一日猿吟の連歌に 1 去年立し春も今朝しる 霞哉 2 かつとけてむすふはかりの氷かな 3 風や春名残たになき氷かな 4 水や春むすはまほしき心かな 5 春の風いつくもをよふ草木かな ナシ ナシ</p>	<p>1 2 3 4 ナシ 人日子日ありし年に 5 けふにあひて松引わかな摘野かな 生れて二歳の児の春をことふ く 発句に 6 花さかむ松の千とせの二葉かな</p>	<p>1 2 3 4 5 6 ナシ</p>	<p>1 2 ナシ ナシ ナシ 3 4</p>

(図表三)

巻六恋連歌上		続類徒本(第三類)		古粹堂本(第二類)		岩瀬本		(第一類)	
14	13	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
誰にならへる恋路ともなし 1 ぼの見しを心のかよふはしめにて とすれは心うかるゝもうし 2 ぼのみしや誰そとおもひ捨やらて あかつきならすね覺をそする 3 みし人やならはぬ夜半の我おもひ		なひくかきりにおもひよはるな 1 ぼの見つゝけふをしめゆふはしめにて ナシ ナシ ナシ		2 ナシ けふるやむろのやしまなるらん 3 よそののみ聞こし物をわかおもひ うき名はたつといひやのかれむ 4 いかにせむこゝろのしるをわかおもひ 心のうちにあらましの末 5 ぬれにけりいはぬをしるや袖ならん		1 ナシ ナシ ナシ		2 なにとなくなかむるからの物 思ひこゝろに人のこひしきやたれ 2	
5	4	3	5	4	3	5	4	3	1

(图表四 1)

卷一 春連歌	図書寮本（第一類）	合集本（第二類）	英王堂本（第三類）
わかれしかたそけふもかすめる	1 天地となりて幾春立ぬらん	1 わひぬる身にも年はこえけり	1
ナシ	ひとむらの霞も速くうちはへて	ナシ	2
2 いく代けふたつ春の山のは	枝よはけなる青柳のかけ	ナシ	ナシ
3 春はふくかせのちからも見えやらて	ことのほかなる春の夕風	ナシ	ナシ
4 立かへりけふは去年より寒き日に	ナシ	、舟よするきしのねしろの柳陰	ナシ
ナシ	ナシ	3 こぼりうちとけあらふ岩なみ	ナシ
ナシ	ナシ	うくひすつたふくれ竹のかけ	ナシ
ナシ	5 山本の霞の朝けおくさえて	4 水こぼる岩のかけひも春はきて	ナシ
雲井になりぬたつの鳴声	雪より出る鳥の一声	あらたまる年のかへる古郷	3
		5 よし野山かすみて又やさえぬらん	ナシ
		6 霞にものこりてさむき山ふかみ	ナシ
			ナシ

(图表四 2)

6	立かへりふるき都の春かすみ	ナシ
7	玉すたれあくる夜をこめかすみ来て 春もあはれになら山のかげ	ナシ
8	朝かすみ野守も庵や出てみむ 花はいつくそ梅匂ふなり	ナシ
9	霞むよは猶明ほのくくらふ山	ナシ
10	明ほのや霞にたてる末のまつ あたし心はさもあらはあれ	ナシ
11	山のはゝ去年の名こりの猶さえて あさ夕のかすみの衣なれゝて	ナシ
12	とをさかり行こそそのさむけさ	ナシ
13	とをさかり行こそそのさむけさ	ナシ
14	とをさかり行こそそのさむけさ	ナシ
15	とをさかり行こそそのさむけさ	ナシ